

諸井 薫

男の自負

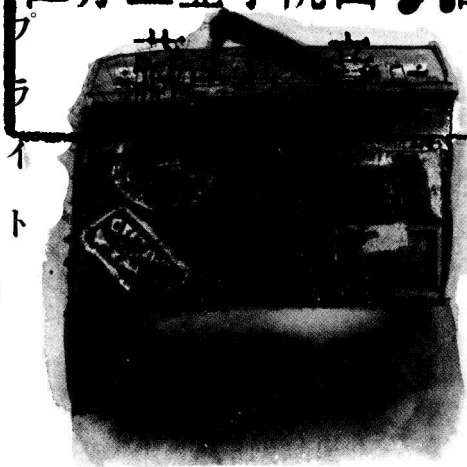
プライド



男の自負

諸井 真

江苏工业学院图书馆



諸井 薫 (もろい・かおる)

1931年東京に生まれる。早稲田大学文学部中退。『週刊女性』編集長，世界文化社常務，プレジデント社社長兼主幹を歴任。現在，評論家・作家。主な著書に、『男の流儀』『男の背中』（日本経済新聞社），『男の止まり木』『不機嫌な理由』（文藝春秋），『男女の機微』『蹟きの石』（中央公論社），『男の感情教育』（新潮社），『いい一生とは何か』（角川書店）などがある。

男の自負 ブライド	一九九七年八月二十五日 一版一刷	著者 諸井 薫 © Kaoru Moroi 1997	発行者 竹内正紀	発行所 日本経済新聞社 東京都千代田区大手町一―九一五 千100―66 電話番号 (03) 三二七〇―〇二五一 振替番号 〇〇一三〇―七一五五五	印刷・精興社 製本・大口製本	ISBN 4-532-16225-4
---------------------	---------------------	-------------------------------	----------	---	----------------	--------------------

本書の無断複写複製（コピー）は，特定の場合を除き，
著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

男の自負／目次

プライド

パソコン・ブーム	7
男の髪形	15
戦後民主主義	24
メーデー	33
海外雄飛マインド	42
金融不安	51
オウム事件	59
沖縄への負債	73
二つの焼跡	81
米と日本人	89
スチュワードス	97
拳銃	105

目 次

進駐軍	114
生粋の昭和人	123
「時」からの自由	134
「半飢餓」の記憶	138
結婚の原点	147
家族旅行	155
手首の傷	164
妻よ／	173
私の酒歴書	181
銀座“昼の部”の住人	190

〔装画＝市川興一〕

男の自負

プライド

パソコン・ブーム

パソコンをめぐる異様とっていいフィーバー、インターネット、マルチメディアといった電子情報通信に対する熱い関心ぶりに、ちょっと首をかしげでもしようものなら、たちまち、「新しい時代についていけない年寄りの自己正当化」と鼻の先で嗤われるのがオチだが、それを承知で、あえて異を立てる。

男は、ノート型パソコンを持ち歩くようなことはしないものの、周辺にはワープロもあればパソコンもあって、それがどのような機能を持ち、実際にどう仕事に役立つかといったことについては、概略承知しているつもりでいる。

しかも近頃は、そういう電子機器にヨワイ中高年を、どうやって馴染ませようという親切心からか、男をその「遅れている中高年」の典型と見立て、「どうですか、イロハのイから

パソコンを習い始めて、その体験談を書いて頂けませんか」という原稿依頼まで飛び込んでくる。それに対して男は、「……私はすでにパソコンを仕事で使っているから、イロハのイというわけにはいかない」と、ニべもなく断わる。だがその実、人に命じてパソコンを行動はするものの、自分ではいたずら程度にしか使わない。それどころか、いまだに、原稿はハンドライティングなのである。

これには、男なりの理由がある。一つは、すでに齡六十五、年金受給資格年齢だから、自分でやりたいこともそう長いこと現役で仕事をやらせて貰えるとは思えない。後十年、十五年現役を続けるというなら、パソコンに慣れておいた方がいいが、その必要があるとは思えない。

さらにいえば、現在のパソコンは、話題のウィンドウズ95を含めて、ビジネスユースとしての使い道はまだまだといわざるを得ない。要するに、まだまだ目新しいオモチャの域を出てはいないが、いまのうちからパソコンに慣れておくのは満更意味のないことではない、という程度の肯定的認識はある。

インターネットとやらも、男は「自分は縁なき衆生かな」と半ば諦めかけている。その最も大きな理由はやはりソフトの問題だ。実際に利用している人間にあれこれ聞いてみるのだが、やはり、本当にそれが役に立つのは五年、十年先ではないかと口を揃えて言う。たしか

に、学者のような職業の場合、国際的に日々発表される新しい研究成果が蓄積され、それをリアルタイムに検索できるというのは、研究能率の上で画期的であろうことは容易に想像される。しかも、学者は自分の専門分野に限っては言語障壁があるはずがない。

ところが男のように英語にヨワイ人間は、インターネットにしるマルチメディアにしろ、英語によるグローバルなネットワークはそれこそ猫に小判というものだろう。そのうち日本語訳がつくようになるという話もあるが、コストもかかるだろうし、第一リアルタイムというわけにはいかなくなる。

それと、男がかねがね思うことは、現在の東京における八チャンネルプラス衛星放送三チャンネルでさえ、観たいものが重複することがあるし、観たい番組をビデオに収録する人は多い。だが、そのビデオを果たして見る暇があるのだろうか、他人事ながら気になってならない。それがマルチメディアになると百ものチャンネルがあるというのだから、いったいどういうことになるのだろうか。一日二十四時間しかないことには変わりないというのに、その時間を奪い合って視聴者、利用者争奪戦を演じるその熾烈な競争に、果たしてソフト提供者者が生き残れるのか。その辺も気になるところだ。

まあ、それもよからう。取らぬ狸の皮算用の当てがはずれただけのことだし、第一、他人事に過ぎない。しかし、見方をまったく改めて考えると、この電子高度情報化社会というの

は空恐しい。九五年の阪神大震災のときがまさにそうだったが、電気が止まるということの恐しさには計り知れないものがある。真冬の夜、超高層のオフィスビルで電気が止まったらどうなるか。照明はもちろん、空調もエレベーターもすべて止まり、水道まで出なくなる。電気への依存率が一〇〇%のアーバンライフをパニックに陥れるのは、それこそ赤子の手を捻るよりたやすい。

戦中戦後、東京あたりではしょっちゅう停電があったが、ローソクをつければそれで事足り、他には格別の不都合はなかった。電気冷蔵庫も空調もなく、炬燵はタドンだったからだ。だが、いまはどうか、停電が二日も続いたら、夏場だったら冷蔵庫の中のものは腐るし、市民はたちまちギブアップだろう。思えばわずか五十年の間に日本人もひ弱になったものだ。

男は、寝袋とスコップ一本あれば、どこでも生きられるという自信がいまでもある。スコップで穴を掘り、その中に寝袋を置いて潜り込めば、真冬でも結構凌げる。それに、そのあたりから枯木を拾ってきて火を熾おこせば、それで暖も取れるし、湯も沸かせる。戦前、男達はそういう訓練を受けているだけに、いざとなってもたじろがずにいられる。ところがいまはどうか、ライフラインが断たれたらおしまいだと、すぐ音を上げる。これとまったく同じことが、電子高度情報化社会にもいえる。

パソコンを操作しながら数表を作っている人の後ろでそれを眺めていてふっと思うのは、

その人間が、まったく計算という頭脳作業をしなくなってしまっていることだ。しかもこうした「頭の休憩」は、なにもパソコンが出てきてからのことではない。電卓の登場以来の変化だ。

外国へ出かけていって、買い物をして支払いの段になると、向うの店員の数字に弱いのに呆れ果てた経験があるが、その点日本人の計算能力、とくに暗算能力は傑出して高かった。その多くはソロバンを小学生時分に徹底して叩き込まれたのと一緒に、暗算もやらされ、算術の試験は計算能力を高めるために、やたらと問題の数が多かったものだ。

ところが、電卓が普及してからというもの、キーを叩きさえすればいいのだから、暗算などという頭の負担になるようなことをあえてやる酔狂な人間がいるはずもなく、三ケタの足し算引き算でも電卓に頼ろうとする。電卓は営業マンのアタッシェケースの必需品であり、会議の席には書類と一緒に電卓を忘れることはない。それどころか胸ポケットにはカード類と一緒に薄型の電卓が不可欠となれば、誰も暗算などしなくなる。かくて、かつて日本人の特技であった暗算能力は見事に退化して、いまや電卓なしでは小学校低学年並みの計算能力も覚束ないという有様だ。それでも、昔ソロバンや暗算でしごかれた経験を持つ世代は、電卓がなければいけなくて、昔同様というわけにはいかないまでも、なんとか暗算で凌げるが、物心ついて以来電卓しか知らないという新人類は、電卓を取り上げられたら手も足も出ないの

ではあるまいか。

コンピューターの出現は、まず人間から計算の負担を肩代わりしてくれ、しかもその能力は神業を思わせるハイスピードだから、どんな暗算の天才も張り合う気になれず、すべてお任せということになる。そのミニ版である電卓でさえ、現代人から計算能力をあれだけ退化させたのだから、パソコンの普及の向う側に予測される『電腦依存社会』が現実のものとなったら、人間のホモサピエンスとしての優性に基づく能力はいつの間になっちゃうのだろうか。

比喩的にいえば、一方で一〇〇メートルを九秒台で走る超人ランナーを育成しながら、他方では、大多数の人間が可能な限り足を使わず乗物に頼って、短時間長距離移動をさらなるものにしてしまっているのに似て、近未来社会は、優れた電腦を作り出すひと握りの頭脳と、その電腦に何もかも依存して、自らの脳を退化させるばかりの人間に分れるに違いない。

碁や将棋、麻雀、チェスといった頭脳と直感力を最大限に生かしたゲームがすたれ、反射神経だけが頼りのファミコンゲームにとって代われそうな気配だが、そんなふうに『頭の体操』を怠けてしまうと、人間はいつたいていどうなるのか、皆目見当がつかない。とにかく、バーチャルのなんと、片仮名まじりの『新奇』が次々に登場するが、スピルバーグのSF映画と同様、観ている最中はハラハラドキドキさせられるが、よくよく考えてみれば、およ

その知的興奮とは無縁のただのコケ威しに過ぎない。

データベース、パソコン通信、インターネットといったものも、たしかにその機能において画期的な便利性を持っている。だが、そういう電腦がもたらす便利性に慣れてしまうと、苦勞して調べたり、さまざまな角度から分析する意欲が失せてしまう。それはそうだ。ワンタッチで欲しい資料、文献が立ちどころに眼前に現われるのだから、それにそっぽを向いて、図書館や資料館、博物館にわざわざ足を運ぶ気にならなくなって当り前だ。しかも、そうしたデータは優れた専門家によって選ばれ、オーソライズされているだけに尚更だ。

しかし、こうしたあてがいぶちというのくらい頭腦の知的トレーニングに逆行するものもないのではないか。たとえていえば、テストのとき、クラスのボスのところへ、出来る子の答案が次から次に回ってくるようなもので、「ああそうか」と、ただ書き写していさえすればいいのと同じで、知識が身につくはずがない。しかも、電腦情報機器は、書き写す必要さえない。

何かを調べていて一つの疑問に逢着したとき、それを解明するために、知識の森に迷い込み、さまざまな試行錯誤の末にようやくそれを解くカギに辿り着いたときくらい成就感を覚えることもない。さらに、その過程における知的類推自体が大切なのであって、それを、ヘリコプターに乗って上から探すにも似た電腦依存方式では、その肝腎な部分がすっぱり空白

になってしまうのと同じことで、すこぶるもったいない。

ワープロの漢字変換にも似たようなことがいえる。男は、冒頭でも述べたように、原稿書きにはワープロは用いずいまだに手書きを頑なに守っている。別段ワープロを毛嫌いしているわけではないが、手書きの方が乗り易いということが大きい。

それはさておき、男は原稿用紙の傍らに常に国語辞典を置き、ちょっとひっかかるとすぐそれを引いて確めながら書いている。ところがワープロで書いている人たちを見ると、横に辞典を置いている人はごく少ない。たしかに仮名で打てば漢字に変換してくれ、同音異語は、そのワープロが記憶している限りの文字を出してくるからその中から選ばいいのであって、字引きの世話にならなくても済むリクツだ。

だが、そんなふうにはワープロの漢字変換機能に頼ってばかりいると、そのうちに、どの同音異語が自分の求めている文字か判断がつかなくなるのではないかと、心配になってくる。テレビのクイズ番組に出てくる大学生があまりに漢字を知らないのにびっくりすると同時に、あるいは、これにはワープロのせいもあるのではないかと疑ってみたくなる。男は、電腦よりもやはり自分のお粗末な“人脳”に頼っていいこうと思ひ直すのである。